

## 書 評

大石高典著『民族境界の歴史生態学—カメルーンに生きる農耕民と狩猟採集民』、京都大学学術出版会、2016年、264頁、3,700円＋税

辻 貴志

本書は、東京外国語大学・特任講師である大石高典氏によるものである。大石氏は生態人類学の立場から、アフリカのカメルーン共和国の森に棲む人びとの文化や自然を主に研究対象としてきた。本書は、その一区切りであり、歴史生態学の文脈から森の狩猟採集民と焼畑農耕民の共存の仕組みを、「分離的共存」という新たな切り口で考究したものである。本書は序章と終章を含め9章からなる。以下、本書の内容を章立てに沿って紹介し、書評を行いたい。

序章「揺れる境界—自然／生業／社会のねじれ」では、本書の研究テーマを表明する。カメルーン共和国の森に棲む狩猟採集民バカ・ピグミーと焼畑農耕民バクウェレを対象に、森という空間の中でいかにお互いが交流し、排除し合うことなく共存を達成しているか、そのメカニズムを解明する。従来の研究では、狩猟採集民と焼畑農耕民の関係性を、相互の不足を補うことで成立していると捉えてきた。著者はこうした二項対立的な解釈を修正し、両者の関係を「分離的共存」という新たな視点から捉え直すことを本書の挑戦課題に設定した。「分離的共存」とは、狩猟採集民と焼畑農耕民の間に特徴的な生業の差異が認められなくなっている現在、両者が同化することなく、明確な民族境界を維持している共存状態を表す。

第1章「ドンゴ村へ」では、本書に登場するバカ・ピグミー、バクウェレ、商業民ハウサの概要と民族間関係を紹介する。バカ・ピグミーは今日、定住化が進み、狩猟採集だけでなく焼畑農耕を営む。バクウェレは、焼畑農耕に加え、漁撈も行う。両者はカメルーンがフランスから独立後に、半強制的移住と集住化政策により隣接居住するようになった。現在、バカ・ピグミーはバクウェレのカカオ園を手伝いつつ、自らもカカオ栽培を行う。両者に加え、半定住のイスラームの商業民ハウサの存在も確認できる。商業民ハウサは貨幣経済的に力を持ち、交易により森と都市、森とサバンナをつないでいる。

第2章「原生林」のなかの近代—廃村の歴史生態学」では、森林景観が世界システムと大きく関わり変遷してきたことを、過去100年の歴史資料や遺物などの調査からひもと



く。フランス植民地期以前、カメルーンはドイツの統治下にあり、ドイツは天然ゴムの採集と栽培を強制的に行った。フランス統治期には、フランスはカカオとコーヒーの栽培を導入した。象牙交易も行われた。貨幣経済も浸透し、石器、土器・陶器、金属、プラスチック・ガラス、衣服などの遺物にその痕跡が残っている。バカ・ピグミーとバクウェレは、以上の換金作物の導入を契機に、互いに労働力交換の依存度を高めていった。

第3章「森の「バカンス」—二つの社会的モード」では、焼畑農耕民バクウェレの森の中での漁撈キャンプをトピックとし、普段森棲まいのバカ・ピグミーたちを動物扱いする彼らがなぜ森に執着するのかを明らかにする。バクウェレは漁撈キャンプを「森のバカンス」と呼び、日常の喧噪やストレスから逃れるために実践している。漁撈キャンプでは、様々な漁法を行い、動物性資源だけでなく、野生ヤマイモのような植物性資源も積極的に採集する。肉を得ることができる動物などの漂流物も重要な資源である。漁撈キャンプは共有地であり、村棲まい時には経験できない人間関係の緩さのある空間を創出している。

第4章「「ゴリラ人間」と「人間ゴリラ」—人間=動物関係と民族間関係の交錯と混淆」では、ゴリラを事例に森の人びとの社会関係を明らかにする。ゴリラは森の人びとにとって、関心高き動物である。人びとは10の状態に分けてゴリラを分類し、身体部位も人間と同様に分類する。ゴリラは食用であるが、獣害駆除の対象ともなる。バカ・ピグミーは主に鎗と銃でゴリラを狩猟する。ゴリラは危険な反面、賢い動物であり、倒すことはハンターにとって名誉である。バカ・ピグミーは、バクウェレの粗暴な態度をゴリラと重ね合わせ、バクウェレはゴリラの生まれ変わりである「ゴリラ人間」だとする。一方、バクウェレは、人間がゴリラの姿をした危険な「人間ゴリラ」の存在をバカ・ピグミーのこととして捉える。

第5章「バカ・ピグミーによる換金作物栽培と民族間関係」では、バカ・ピグミーをめぐるカカオを中心とした換金作物栽培の民族間関係と従来の平等主義への影響を検証する。カカオ畑での労働は賃金労働であり、主にバカ・ピグミーが労働力として作業に従事する。バクウェレは強制的にバカ・ピグミーを働かすことから、バカ・ピグミーの間では商業民ハウサの方が条件がよいという世論を形成している。バカ・ピグミーはカカオ園で現金収入を得ても、バクウェレが扱う酒などに浪費してしまい、民族間の経済的な不平等は解消されない。さらに、バカ・ピグミー間での貨幣経済への対応の違いにより、共同体内での将来的な従来の平等主義の維持に暗雲が立ち込めている。

第6章「嗜好品が語る社会変化—精霊儀礼からディスコへ」では、たばこ酒を中心に嗜好品と民族間関係を議論する。バカ・ピグミーにとってたばこは狩猟時や社交時に不可欠である。酒は、ほとんどがバクウェレや商業民ハウサが生産したものであり、カカオ園の労働代価としてバカ・ピグミーに与える。バカ・ピグミーはもともとほとんど飲酒しないが、今日、飲酒は日常化している。酒はバクウェレにとっても、バカ・ピグミーをカカオ園での労働のためにつなぎとめるための資源であり、バカ・ピグミーはよりよい条件を選択する。嗜好品は、バカ・ピグミーの農耕化と定住化、そして現金の流入により浸透し、バカ・ピグミーを市場経済に統合する要素となっている。

第7章「周縁化されるバカ・ピグミー—森のなかのマイクロな土地収奪」では、カカオ園の貸借と売買により、土地の半永久的な所有意識が希薄なバカ・ピグミーの間に生じている土地問題を照射する。多額の現金が必要になると、バカ・ピグミーは自身のカカオ園の貸借、売却を繰り返す。聡い商業民ハウサは、バカ・ピグミーの借金がかさむと公的文書の権威によって彼らの土地への権利を剥奪しようとする。バカ・ピグミーの土地の所有権は経済力のある商業民ハウサに移行しつつある。現段階では小規模な土地収奪であるが、将来的にバカ・ピグミー、バクウェレ、商業民ハウサの間に根深い土地紛争が起こる可能性があり、バカ・ピグミーの周縁化や社会階層化が懸念される。

終章「開かれた境界—自然／生業／社会の広がり」では、本書のテーマである「分離的共存」について検討する。バカ・ピグミーとバクウェレの関係は蔑視し合う関係であっても、お互いを必要とし合ってきた。現金経済面では、バカ・ピグミーは商業民ハウサとより深い関係を築きつつあるが、バクウェレに対するほどの関心を抱いていない。こうした民族境界が成立してきたのには、熱帯林という森の世界が影響していると考えられる。つまり、「分離的共存」が可能となったのは、バカ・ピグミーとバクウェレが熱帯林での環境・資源・認識を共有してきたからに他ならない。結果、バカ・ピグミーとバクウェレは森を介して平和裏に「分離的共存」を達成している。

以上が、本書のおおよその内容である。本書でもテーマとなったように、多くのピグミー研究は共存関係や平等主義の研究に力点を置いてきた。従来の研究では、ピグミーは農耕民に対して劣位であり、パトロン＝クライアント関係のクライアントとして扱ってきた。また、彼らの社会は徹底した平等主義であったが、本書が明らかにしたようにしだいに平等主義は希薄化しつつある。代わって、現金経済や換金作物、さらには商業民ハウサといった要素によって変容の進んだ社会における、民族間の関係とバカ・ピグミーの対応に本書は焦点を当てている。そして、蔑視しつつも、お互いを排除することなく、「分離的共存」を達成しているバカ・ピグミーとバクウェレの民族間共生を解明した点が本書の特色であろう。

本書は、バカ・ピグミー、バクウェレ、商業民ハウサといった森棲まいのアクターたちの民族間関係について、歴史生態学を援用して解明している。ピグミーとバクウェレの関係は商業民であるハウサの関与により変わりつつあり、ピグミーの経済的な自立性が芽生えつつあることも報告している。森の世界の生活についても、原生林、バカンス、ゴリラ、換金作物、嗜好品、土地収奪、森に関する観念をはじめ、森棲まいの人びとの社会環境の状態と変容の過程を取り上げており、今日の熱帯雨林の減少とその住民の運命を検証する上でも貴重な民族誌である。

ただし、本書には物足りない点もある。特に、本書の核である「分離的共存」についてのモデル化と定義化ができていないことである。「分離的共存」とは著者独自の視点であろう。本書を読めば、おおよその「分離的共存」の在り方がわかるが、「分離的共存」についての深い事例研究、関連研究との比較研究は確認できず、「分離的共存」の位置づけが不十分である印象を受けた。また、些細ではあるが、第2章のIVの見出しには象牙につ

いて示されているが、文中にその記述はなく、森の中での象牙の採集や交易についての詳細を知ることができないのが残念である。

加えて、本書では、カメルーンの森や川の動植物、食事リスト、労働内容と時間など、クラシックな生態人類学的データが不足している。本書は歴史生態学を視野に入れ生態人類学の見地から狩猟採集民、農耕民、商業民間の「分離的共存」についての独自の強い研究であることから、従来の生態人類学的データの多くは省いたのかも知れない。森の民の暮らしの構造を知る上で、基礎的な生態人類学的データは有用であり必要であると思われるが、著者はそれらに頼ることなく、森の中の民族間関係と環境変化の歴史生態学を生態人類学の立場から描き切っている。

本書には、7つのエッセイと1つのコラムが収められており、著者とカメルーンの森の人びととの関係をより身近に窺い知ることができると同時に、著者の人となりと世界観に満ちている。アフリカの森の猛者たる人と環境を相手に駆け抜けてきたフィールドワーカーの心性が垣間見えよう。特に熱帯熱マラリア罹患のエッセイは、本書が生死にもがいた苦心の作であることを伝えている。エッセイの中には、著者が俳句をひねることに触れられている。「コンゴ河肺魚ぬたりと聖夜かな」などの句を詠んでいるが、生活者の眼や現地語での表現による感性の重要性、安易な翻訳に対する注意点を指摘している。そして、「ローカルな豊かさをどのように俳句のなかで表現し、共有できるのか」と著者は五・七・五の世界で問うている。これは民族誌の記述と通ずる重要な問題意識である。本書は民族誌を記述することの厳密性とおもしろさの伝え方についても追求している。

本書は、それは遠いカメルーンの森の中の世界を対象にしているが、植民地経験、換金作物、自然保護など、取り上げている内容は我々の世界とかなり近い。「分離的共存」の問題もまた、同時代的に重要である。本書にあるように、「ヘイトスピーチ」や「パリ風刺画問題」が近年世界的に憎悪を引き起こし問題となった。森の民のごとく「分離的共存」の思考を持つなら、こうした相手をあからさまに否定したり攻撃したりする対立は起きにくいと著者は考える。分離的共存とは、完全な共存ではなく、相手を蔑みつつも、同化することなく、境界を維持する共存の形態である。また、共存のより成し遂げにくい社会環境下でのシステムであるが、バカ・ピグミーとバクウェレの「分離的共存」は平和裏に発達してきた。著者は、「分離的共存」が決定的な対立に至らない理由について今後の研究課題に据えている。今日、世界で民族間対立がエスカレートする中、必要以上に相手を排除しない「分離的共存」はよりよい民族間共生に向けたひとつの手段ではなかろうか。遠い世界の森に生きる人たちの事例ではあるが、今日に生きる我々は彼らから共存の手法を学ばねばならないであろう。現実的にそうすることは単純でないであろうが、本書は人類学が平和や平等のための学問であることを再認識させてくれる。